様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０３０５２

研究課題名（和文）東南アジア島嶼部の高地社会におけるコーヒー栽培と生活様式に関する人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study of Coffee Farmers in the Indonesian and Timor Uplands

研究代表者
福武　慎太郎（Fukutake, Shintaro）

上智大学・総合グローバル学部・教授

研究者番号：８０４３９３３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：コーヒーチェリー栽培をおこなう東南アジア島嶼部の高地民の暮らしについて、1)コーヒーチェリー栽培導入の歴史的経緯と貨幣経済の浸透、2)贈与交換経済と貨幣経済の関係について、現地調査と文献調査に基づき考察した。東南アジアの高地社会では、植民地統治が本格化する20世紀初頭まで貨幣使用は限定的であり、少なくとも1980年代まで贈与経済が優勢であった。独立後の東ティモールでは、コーヒー・チェリー栽培の収益への経済的依存が高まっている一方、贈与経済は根強く、市場経済と贈与経済の並存が高地民の生活を圧迫していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
コーヒー・チェリーなどの換金作物栽培の拡大が、貧困を解決に導くよりもむしろ悪化させることになった歴史的文化的背景を解明しようとしている。政府や援助機関は、貧困の要因として従来の伝統経済を指摘し、山地社会の貨幣経済化を進めているが、そうした試み自体が状況を悪化させていることを指摘した。本研究の意義は、市場経済の問題点を、伝統経済への信頼が根強い東南アジア高地社会の社会変容から考察し、新たな政治経済モデルの構築に貢献することにある。

研究成果の概要（英文）：This study examined how the upland people in the insular Southeast Asia had changed their way of life by the introduction of coffee cultivation drawing on field research accounts and ethnographic literatures. Focusing on the historical background of the introduction of coffee cultivation and currency by colonial power, and the current relationship between traditional economy and market economy in the uplands in Timor-Leste and Indonesia, this study explored the use of currency had been extremely limited and gift economy still had been dominant in the uplands of Timor-Leste and Indonesia until 1980s. The study also discussed that coffee farmers in the contemporary Timor-Leste became heavily to depend upon the income of coffee cultivation, and the coexistence of market economy and traditional economy has affected their living of coffee farmers.

研究分野：文化人類学

キーワード：東ティモール　インドネシア　コーヒー　人類学　贈与　貨幣　経済

１．研究開始当初の背景

インドネシア高地社会における換金作物の導入による社会変化の研究に、Li(1999)らの研究がある。東南アジア島嶼部における植民地権力や近代国家、企業による開発の影響に関する従来の研究対象は、低地社会がほとんどであったが、Li らは、高地社会の社会変化の研究に取り組んだ。そこで明らかにされたことのひとつは、自ら特定の換金作物を選択的に導入するという高地社会の人々のエージェンシーである。本研究の研究対象地域のひとつである北スマトラ・バタックにおけるコーヒー・チェリー栽培の導入は、外的権力による強制的な力が作用したというよりも、低コストかつ労働負担が少ないことを理由に人々が選択した結果であることが指摘されている（Li 1999）。

これまで報告者が、継続的な現地調査をおこなってきた東ティモール民主共和国エルメラ県でのコーヒー・チェリー栽培を観察する限り、人々のコーヒー・チェリー栽培に関わる労働負担は比較的軽い。基本的に 2～4 ヘクタールの農地を所有する小規模生産者がほとんどの当該社会では、その農地はほとんど放置されているに等しく、年１度の収穫期を除いて、企業や NGO による指導が入るまでは、ほとんど手入れをされることがなかった。

こうした観察から推察されたことは、これを「栽培」ととらえるよりも「採集」に近い経済活動と捉えたほうが良いのではないかという点である。必要とされる労働時間の少なさから、副業やそのほかの活動に従事する十分な時間が確保される。Fox(1977)は、ロティ島民のロンタルヤシの樹液採取を中心とする経済活動を「パームエコノミー」と名付け、その労働時間の短さに着目し、そのほかの副業に従事する選択肢の多様性を指摘した(Fox 1977)。これらの先行する人類学的知見から、高地社会のコーヒー栽培を中心とした経済活動も同様に、副業やそのほかの活動に従事しやすい経済活動という視点から捉えることが可能ではないかと考えるにいたった。

コーヒー・チェリー栽培に関する諸研究は近年、フェアトレードに関連する研究の蓄積が急激に増えている。こうした研究におけるコーヒー・チェリー生産者は、グローバル市場において価格変動が著しいコーヒー豆取引において常に犠牲となる弱者として位置づけられる。コーヒー・チェリー生産者支援ならびにフェアトレードは、コーヒー・チェリー生産者の自立支援、すなわち交渉力を持つ生産者組合の組織化と、適正な販売価格の維持による現金収入の向上と安定である。

ただし、Li らの高地社会研究や Fox の採集経済研究から着想を得て、コーヒー・チェリー栽培を労働負担の軽い換金作物として高地民が主体的に選択したと仮定すると、単純にグローバル市場の犠牲者としてのみ彼らを理解することは難しい。現状としては新たな消費文化への依存と子どもの教育費への関心から、貨幣経済浸透の結果としての貧困化という位置づけは免れない。他方で、現金収入の低さの結果としてなのか、水牛を中心とする伝統財による贈与交換経済が依然として機能していることから、東南アジア島嶼部高地社会のコーヒー豆生産者を、貨幣経済システムのなかでのみ理解することにも問題があると考える。

２．研究の目的

そこで本研究では、東南アジア島嶼部において、コーヒー・チェリー栽培をおこなう高地民の暮らしについて、1)コーヒー・チェリー栽培導入の歴史的経緯と貨幣経済の浸透、2)贈与交換経済の機能と貨幣経済との関係、3)コーヒー・チェリー栽培に関わる労働以外の時間の使途など生活様式に関して、現地調査と文献調査から明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、東南アジア島嶼部の高地社会のなかでも、1)ティモール島マンバイ社会（東ティモール民主共和国エルメラ県およびマウベシ県）、2)スラウェシ島トラジャ社会（インドネシア共和国南スラウェシ州タナトラジャ県）、3)スマトラ島バタック社会（インドネシア共和国北スマトラ州）のコーヒー・チェリー生産者に焦点を当て、現地調査および文献調査を実施した。現地調査においてはコーヒー・チェリー生産者世帯への滞在を通じて、日常生活の観察とインタビューのほか、生産者と取引のある企業、NGO 関係者へのインタビューを実施した。また当該社会の従来の贈与交換経済、コーヒーチェリー栽培の導入の歴史的経緯について、先行研究を検討した。

調査地は、いずれも東南アジア島嶼部のコーヒーベルト（南北回帰線のあいだの地域）に位置する標高 800 メートル以上の高地であり、良質のアラビカ種で名高い地域である。欧米や日本の NGO、企業が参入し、「トラジャ」「マンデリン」などスペシャルティ・コーヒーとして、またフェアトレード・コーヒーの付加価値をつけて流通している。いずれも 19 世紀後半に導入され、基本的に数ヘクタールの土地を所有する小規模生産者による栽培が一般的である。こうした地域的特徴から本研究ではさらに、NGO や企業が介入することによって流入した新たな価値―「品質」と「組織化」による近年の社会変化についても着目した。

４．研究成果

（１）コーヒー・チェリー栽培導入の歴史的経緯と貨幣経済の浸透

植民地統治が本格化する 19 世紀後半に至るまで、ティモール島内陸部では、一部の有力な親

族集団を除き、貨幣との接点は極めて限定的だった。1894 年よりポルトガル政庁は、ポルトガル領マカオとティモールの通過としてパタカを導入、同時にティモール島領民に人頭税を課した。多くの人々にとって、この税の支払いのためにはじめて貨幣が必要になったと考えられる。貨幣を持たない多くの人々は、ポルトガル政庁の道路整備などの労役への従事を余儀なくされた。1910 年代の大規模な首長たちの反乱は、この税制度に対する抵抗であった。

ポルトガル人や有力首長は 19 世紀前半よりコーヒー栽培を導入し、白檀に代わる重要な交易品となっていた。しかし、現地における聞き取り調査から理解されることは、多くの高地民が小規模生産者としてコーヒー栽培に関わるようになったのは、インドネシア時代（1975-1999）である。つまり納税のための労役従事を除き、ポルトガル植民地期を通じて貨幣経済との関わりは極めて限定的であった。同様の歴史的背景は、インドネシア共和国スラウェシ島トラジャ社会、スマトラ島バタック社会についても言え、トラジャ社会では日本企業キーコーヒーによって 1970 年代に本格的なコーヒー農園の開発と普及が実施されるまで、貨幣の浸透は極めて限定的であった可能性が極めて高い。すなわち、東ティモールおよびインドネシアの山地社会は、少なくとも 1980 年代初頭まで、贈与交換経済が顕著であった地域といえる。現在にいたるまで、これらの三地域は、交換財として水牛が極めて重要であり、結婚や葬儀における儀礼が盛大で多くの水牛が屠殺され共同体で分配されることで有名である。

インドネシア・スンバ島で調査をおこなった Hoskins(1994)は、同様に 20 世紀初頭にオランダ植民地政府によって貨幣が導入された経緯について分析をおこなっている。スンバ社会において当時の貨幣は、植民地権力への服従であり、納税のための労役に従事する意味にほかならなかった(Hoskins 1994)。

（２）貨幣経済と贈与交換経済の関係

独立後の東ティモール山地社会では、農業省の政策や NGO のフェアトレード事業によって、インドネシア時代以上にコーヒー栽培面積が増加し、コーヒーチェリー栽培の収益への経済的依存が高まっている。他方で、贈与交換経済は根強く、市場経済と贈与交換経済が並存している状況が問題化している。現地調査中、農民たちの話題によく出たのが、親族集団の諸儀礼における水牛に代表される家畜供与の負担だった。水牛を飼育していない多くの農民は、市場で購入するために年収をこえるカネを用意しなければならない。なかには借金の返済ができず、農地を手放す者もおり、政府も注視する社会問題となっていた。「儀礼が貧困を招く」という理解が、政府や NGO だけでなく農民自身にとっても共有されていた。

この儀礼の家畜供与の負担がもたらす貧困と政府の取り組みについては、人類学者 Silva(2016)による研究がある。Silva はティモールの伝統的資源管理の慣習であるタラバンドゥを、儀礼における家畜供与に適応し、一定期間の儀礼を禁止するという地方政府主導の試みについて、ガバナンスという視座から考察を行った（Silva 2016）。政府や NGO は、儀礼を浪費とみなし、コーヒーの収益で得た現金を貯蓄する指導をおこなってきたが、人々の贈与交換経済への依存に変化なく、結果として山地社会の貧困化が著しく進行している。

トラジャ社会、バタック社会において、どのように市場経済と贈与交換経済がバランスをとっているかについては今後さらなる調査が必要とされているが、東ティモール山地社会の貧困について検討する上で、その比較考察は有益であると考えられる。

<参考文献>

① Fox, James, *Harvest of the Palm: Ecological Change in Eastern Indonesia*, Harvard University Press, 1977.
② Hoskins, Janet, *The Play of Time: Kodi Perspectives on Calendars, History, and Exchange*, University of California Press, 1994.
③ Li, Tania Murray(ed.), *Transforming the Indonesian Uplands*, Routledge, 1999.
④ Silva, Kelly, Administrando pessoas, recursos e rituais. Pedagogia economia como tática de governo em Timor-Leste. *Horizontes Anthropológicos*, 2016, 127-153.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① FUKUTAKE, Shintaro, The Center of the Land, the Periphery of the State: Wars and Migration in Southern Tetun Society, Timor Island. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 43(3), 査読あり, 2018, pp.1-18.
② 福武　慎太郎、[新刊書紹介]倉沢愛子編著『消費するインドネシア』、東南アジア　歴史と文化、査読あり、2017、pp.68-72.
③ 福武　慎太郎、<書評>久保忠行『難民の人類学：タイ・ビルマ国境のカレンニー難民の移動と定住』、東南アジア研究、2016、査読あり、pp.295-297.
④ FUKUTAKE, Shintaro, Murai Yoshinori and Area-based Global Studies: Reflecting on the development of Sophia Asian Studies and providing considerations for the future, *The Journal of Sophia Asian Studies*, 2015, 査読あり、pp.7-18.

⑤ FUKUTAKE, Shintaro, A Historical Review of Japanese Area Studies and the Emergence of Global Studies, *SUVANNABHUMI*, 2015, 査読あり, pp.77-88.

〔学会発表〕（計 5 件）

① FUKUTAKE, Shintaro, Return of the Cross: A Study of Local Belief and Catholicism in Central Timor 1st Conference of Timor-Leste Studies Association - Brazilian Chapter, 2018.

② 福武　慎太郎、紛争と和解の語られ方－東ティモール受容真実和解委員会(CAVR)最終報告書『Chega!』を読む、日本東南アジア学会第 99 回研究大会、2018.

③ FUKUTAKE, Shintaro, The Centre of the Land, the Periphery of the State: Wars and Migrations in Southern Tetum Society, Timor Island, An international Symposium on Nationalism in Timor-Leste, 2017.

④ 福武　慎太郎、東ティモールにおける非暴力の思想「ナヘビティ」、日本国際文化学会第 15 回全国大会、2016 年.

⑤ FUKUTAKE,Shintaro,　Refugees and the Cross: Religion, Languages, and Borderland in Timor, SEASIA Conference, 2015.

〔図書〕（計 1 件）

① 福武　慎太郎、「NGO の人類学は何をめざすのかー民族誌アプローチとアナーキスト人類学の動向」信田敏宏、白川千尋、宇田川妙子編『グローバル支援の人類学—変貌する NGO・市民活動の現場から』昭和堂、2017、pp.103-124.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。